

主 題：主からの祝福を忘れない 4

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章5－6節

コリント人への手紙第一をお開きください。今日、私たちは1章の5節と6節のところを学んでいきます。「教会とはいったいどういう集まりなのだろう?」、教会についてこのように言うことができます。「教会とは、神を愛する者として生まれ変わった人々の集まりである。」と。この人たちは、神によって自分自身の罪深さに気付かされ、心からの悔い改めをもって主イエス・キリストの備えてくださった完全な救いを受け入れ、新しく生まれ変わった人たちです。彼らは常に主の大きな犠牲を覚えて感謝しています。また、神を愛するゆえに、神の真理への変わらない渴望をもって、みことばから真理を探り、それを知り、理解し、その実践のために互いに励まし合いながら、神の栄光を現わそうとしています。このような人たちの集まりが教会であると言えます。

このようなことを私たちが聞く時に、自分自身に問い掛けてみるべき質問は「自分は生まれ変わった者としてそれにふさわしく生きているかどうか?」「神のみこころに沿って生きているかどうか?」「神を愛する者として自分自身は成長しているかどうか?」です。パウロはこのコリント人への手紙を記した時に、コリント教会にある問題を熟知していました。何がこの教会の問題なのか?教会に入り込んで来た「偽教師たち」は、人々の心の目を、また、関心を神から遠ざけようとしていました。そこでパウロは今一度、救いに与った者たちがどのような祝福を神からいただいたのか、そのことを彼らに思い起こさせるのです。神の祝福を覚えること、そのことが主の前を正しく歩むために絶対不可欠であることをパウロ自身が知っていたからです。キリスト者が、神からいただいた救いの恵み、また、日々与えられている数々の恵みへの感謝を忘れたなら、不平不満を口にする感謝のない信仰者になってしまいます。そのことは私たち自身がよく知っていることです。

私たちがしっかりと身に着けていかなければならないことは、神への感謝をもって歩み続けることです。そのために私たちは、これからどのような祝福をいただくのかではなく、すでにいただいた祝福をしっかりと覚えることです。すでに私たちはこれまでに五つの祝福を見て来ました。

1. 「主の恵み」をいただいた 1節

私たちに与えられた罪の赦しは100%神の恵みであったということです。私たちが何かをしたからとか、特別な人間になったから神がこの祝福をくれたのではなく、神からの一方的な祝福であると言えます。パウロは1節で特に「神の恵み」にフォーカスを当てていました。

2. 「神の所有」とされた 2節

私たちは神に属する者であるということです。神が私たちの主人、神が私たちの所有者であると、そのことを教えました。

3. 「神から恵みと平安」をいただいた 3節

この世の与える恵みや平安ではなくて、神だけが与えることのできるものを私たちはいただいたということです。

4. 「救い」 4節

ここでは特に、主が私たちのために為してくださった大きな犠牲を明らかにしました。ここのフォーカスは「犠牲」でした。どんな大きな犠牲によって私たちはこの救いに与っているのか、パウロはそのことを教えるのです。

主の恵みによって救われたこと、あなたは神の所有とされた、あなたは神から恵みと平安をいただいた、そして、あなたは大きな犠牲によって救いに与ったと、そのことを教えて第5番目に挙げる祝福は「主の豊かさ」をいただいたことです。

5. 「主の豊かさ」 5節

パウロが言うことは、ただ救いに与っただけでない、神は私たちに変化をもたらしてくださった、私たちを変えてくださったということです。5節「**というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。**」、この箇所を直訳すると「**すべてにおいてあなたがたはキリストによって豊かにされたのです。すべてのことばとすべての知識において。**」となります。「豊かにされた」ことについての説明がされています。

◎「**豊かにされた**」：これは「**富む者となる、高価で価値のあるものを豊富に身に着ける**」という意味です。与えられた祝福がたくさん豊かにあるということです。この5節では新改訳聖書の第2版で

は「あって」「おいて」と訳されていることばがあります。実際に、この接続詞は3回出て来ています。

- ・「すべてにおいて」豊かにされた
- ・「キリストにあって」豊かにされた
- ・「ことばと知識において」豊かにされた

このことをパウロは強調するのです。そのことはこの後見ていきますが、これらの点において神のすばらしい恵みが私たちに与えられていると言うのです。5節でパウロが言いたかったことは、「主によって救われた者、つまり、クリスチャンはすべてにおいて富んでいる者、すべてにおいて豊かにされた者たちである。」ということです。

◎「すべて」：これは救いに与ったあなたがクリスチャンとして生きるために必要なすべてのことが、豊かに十分に与えられたということを教えています。その上で、この5節の中には「すべて」と言いながら、二つのことが特筆されています。一つは「ことば」であり、もう一つは「知識」です。このことをパウロは特に強調したかったのです。

1) 「ことば」

「ことば」とは私たちが普通に話している会話のことです。パウロは、確かに、すべてのものが変えられたが、その中でもこの救いによって「ことば、会話」が変えられると言います。イエスを信じて救いに与った者たちは、神がお喜びになることばを語る者として変えられたのです。神がお喜びになることを語る者として生まれ変わっているのです。ですから、実際に、私たちは神がお喜びになることを語っているのです。

☆語るべきことば：

(1) 神の「福音」 = 福音のメッセージを語ります。私たちはこんなすばらしい救いを神が用意してくださったと、この救い、福音のメッセージを語るのです。パウロは、エペソ人への手紙1：13で「この方においてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。」「救いの福音を聞いた」と言います。聞いたあなたがたがその福音を信じたのです。そして、信じたあなたがたは今度はその福音を語る者になったと言うのです。だから、私たちは神が喜ばれることを語る者となったのです。それはこの神のすばらしさを語る時に神はお喜びになるからです。神によって備えられたこの完全な救いを私たちが語る時に神はお喜びになる、その福音を語る者に私たちはなりました。もちろん、私たちが福音を語る時に大切なことは、それを正確に正しく語らなければいけないということです。勝手な福音、聖書が教えない福音を語ることは大きな罪だということは言うまでもありません。

(2) 「真実」 = この社会は「嘘も方便」と言われています。嘘を語るから、私たちは自分が言ったことが真実であることを証明するために何かに誓って話さなければならなかったのです。というのは、自分の言っていることを信じてもらうためには、私たちは何かに誓って「これは真実である」ことを強調したのです。救いに与った私たちはみことばによってこのように教えられています。エペソ4：25には「ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。…」と。コロサイ3：9、10にも「:9 互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行いと一っしょに脱ぎ捨てて、:10 新しい人を着たのです。」とある通りです。

なぜ、パウロはこのように言ったのでしょうか？それは、私たちのすべての会話を聞いておられる方が常にそばにおられることを知っているからです。私たちがこの救いに与ったということは、全知全能の神が常に私たちとともにいてくださるということです。ということは、私たちの会話をすべて神は聞いておられるのです。もちろん、我々の心の願いや思いや考えや想像も、そのすべてのことを当然神はご覧になっておられます。そうでなければ神ではありません。ですから、私たち信仰に与った者たちは自分が口にする事ばに注意しようとするのです。私たちは神が喜ばれることを話そうと思いません。聖書が教えていないこと、してはならないと言われることを口にしようとは思いません。却って、聖書が教えることを語りたくて願います。

皆さんご存じだと思いますが、救いに与った私たちは、この世にあってキリストの代理人だと言うことができます。私たちはこの地上にいてこの世の人たちにだれを明らかにしようとしているのか？私たち自身ではありません。私たちのような者を愛して救いをくださったイエス・キリストを明らかにするために私たちは生きているのです。主イエスの証し人です。だから、私たちは自分がどんなことばを発するのかに注意することは言うまでもありません。

ですから、私たちはこの救いに与ることによって当然「ことば」に変化が生じたのです。神が喜ばれることを話す者になりました。それは、神による福音のメッセージを語るようになったこと、同時に、私たちは神がお喜びなる真実を語ります。それは神が私たちのことばを聞いておられるから、そして、私たちはこの神を代表する者としてこの世に置かれているからです。

3) 信仰の益となること = 聞いている人、特に、信仰者の益となることを語りなさいということです。エペソ4：29をご覧ください。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と記されています。

(1) 徳を高めることば :

・「徳を養う」とは、「家」ということばと「建てる」ということばの二つのことばからできています。このことばは聖書に18回出て来ますが、そのうちの6回は「建物」、5回は「建て上げる、建てる、築き上げる」で、「家を建てる」ということからできたことばです。ただ、このことばは比喩的に「霊的な成長」を意味しています。ですから、1回は「霊的成長」と訳されています。また、「教会の徳を高める」と訳されているのが2回、「徳を養う」と訳されているのが4回です。明らかに、ここでパウロが言いたかったのは建物を建てるのではなく「信仰的なこと」です。

・「役立つ」とは、「有用な」という意味です。「徳を養う」と言った時に、その人たちの信仰が成長するに役立つ、有用だということです。もっと言えば、英語では good と訳することばです。徳を養うのに良いことば、good なことばを話しなさいと言うのです。

パウロはこのエペソ4：29で、あなたの話すことばが兄弟たちの信仰成長に有益なもの、それを助けるものであるようにと教えているのです。ですから、29節の終わりに「聞く人に恵みを与えなさい」と書かれています。このことばの前に「結果や目的を現わす接続詞」が付けられています。つまり、私たちが話をする時の目的はこれだ、このような結果を望みながら語るべきだということをパウロは教えるのです。それは「聞く人に恵みを与えること」です。彼らが恵みをいただくことによって、恵みを受けることによって成長するためにです。

だから、私たちは信仰において互いに成長することを願って助け合っていくのです。たとえば、何か必要を抱えている人がいるなら、主が必ず与えてくださるという主の約束によって彼らを励ますことができます。試練を経験している人がいる場合は、その問題ではなく、主を見上げて主の約束に堅く立つことをもって彼らを励ますことができるでしょう。私たちはそうして互いに励まし合いながら、それぞれの信仰が主によって成長することを望んで、そして、助け合っていく、励まし合っていくと、そのことをパウロは教えるのです。

・「戒め、諭す」ことも、もう一つ加えるとしたら、もちろん、彼らを励ますわけですが、時には、罪を犯している兄弟たちがいるなら、彼らを愛するゆえにその罪を愛をもって戒め、諭すことも必要です。

パウロはテサロニケの教会に当てた手紙の中でこのように言っています。Iテサロニケ5：14「兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」と。「気ままな者を戒めること」が必要だと言います。私たちは、人が聞きたいことを語ることには抵抗がないのですが、聞きたくないことを語ることには勇気が要ります。でも、それはみことばが教えることであり神のみこころです。なぜなら、みな神が喜ばれるように生きていきたい、そのためにはその道から外れているなら「それは間違っている」ということを明らかにすることが必要だからです。そのようにして互いに励まし合いながら高め合っていくこと、それがこの箇所でもパウロが教えることです。

* 「互いに徳を養い合うこと」こそ、私たちが「いつも行う」ことです

もう一度、エペソ4：29を見てください。このような働きを「ただ、必要なとき、」と書かれています。「必要なとき」とは「時宜にかなうとき」のことです。本当に必要としている時に語りなさいということです。ソロモンは箴言の中で「良い返事をする人には喜びがあり、時宜にかなったことばは、いかにも美しい。」(15：23)と言っています。私たちは語るべきことを、語るべきときに語るのです。でも、それを為すためには、私たちはそのときを見極めることが必要です。何を、いつ、どのように話すべきか？そのためには間違いなく神の助けが必要です。神の知恵と導きがなければできないことです。私たちが自分の知恵や力によってやろうとするなら、言わなくてもいいことを言ってしまうたり、言うべき正しいことを間違った言い方で言ってしまうたりします。だから、神の助けが必要なのです。

ソロモンは箴言12：18で「軽率に話して人を剣で刺すような者がいる。しかし知恵のある人の舌は人をいやす。」とも言っています。だから、私たちは一番必要なときに、話さなければならぬことを正しい話し方をもって語れるように神に助けを求めるのです。感謝なことは、そのようなクリスチャンとし

てふさわしいことばを語るために必要なすべてのものが、私たちにはもう十分に与えられているということです。

皆さん、今、私たちが見て来たことは机上の空論ではありません。これは私たちができることなのです。みことばが教えるのは、このようなことをいつも話せるように、人々の信仰の成長に役立つことを話者として私たちは過ごすことができる、それはすべて神の助けによってできるということです。そのために必要なすべてのものが与えられたというのが、パウロが私たちに教えてくれていることです。

でも、私たちがすぐにやってしまうことは、神のみことばを聞いた時にそれができるかできないのかを自分で判断することです。神の命令を聞いた時に「これはできる！」という命令の方が少ないではありませんか？「それは難しい…」と思います。そうでなければ私たちは神のところにいかないからです。神の助けによって私たちは歩むのです。こうして、あなたの語ることばによって信仰者たちが信仰において成長する、そのようなことを語っていきなさい、そのようなことを互いに語り合っていきなさいと、そして、それが「できる」ということを言ったのです。

(2) 徳を高めないことば

エペソ 4 : 29 では、私たちが語るべきことばがどのようなものか？その説明をするとともに、私たちが口に出してはいけないこと、してはならないこと、徳を高めない会話とはどのようなものか、そのことまで説明しています。

・「悪いことば」 = 「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。」とあります。「悪いことば」と「役立つことば」とを対比しています。この「悪い」とは「腐った、不快、偽り、害を及ぼす、不愉快、役に立たない、価値のない」と、そのような意味をもったことばが使われています。信仰の成長に全く役立たないこと、そんなことをいっさい口から出してはいけないと。「いっさい口から出してはいけません。」、これは命令です。しかも、この動詞は現在形です。そこに否定が付けられています。そこで日本語では「いっさい」と言ったのです。つまり、「一つくらいいいではないか…」という言い訳はダメだということです、あなたが語る会話のすべてにおいて、悪いことばがあなたの口から出て来てはならない、あなたの口から悪いことばを一つでも出してはならないと、この命令がこの 29 節の初めに記されているのです。

パウロはコロサイ書の中で、3 : 8 「しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい」と言っています。

「恥ずべきことばをすべて捨てなさい」と言います。先にも見たように、私のことばを聞いている方があなたの前にいる人以外にもいるのです。いつもあなたとともにおられ、あなたのうちに内住されている神です。その神が聞いておられる、その神が耳を覆うようなことをあなたは口にしてはいけないのです。聞いている人の徳を高めないようなことを口にしてはいけないと、このようにみことばは私たちに命じるのです。

なぜなら、皆さん、主イエス・キリストご自身がこのように言っておられるからです。マタイ 12 : 36 「わたしはあなたがたに、こう言ひましょう。人はその口に作るあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。」と。ことばについて大変厳しいことをイエスは言われました。あなたの言ったことばには責任が伴うということです。悲しいことに、私たちは悪いことばを発してみたり、特に、人のゴシップを流してしまったり、良くないうわさを流したりと、どちらかと言うとこのほうが得意かもしれません。人のゴシップに関心があるから、いろんなワイドショウやいろんな雑誌が出回っているのです。

教会の中でも実はそのようなことが起こったということが、ヨハネの手紙第三に書かれています。Ⅲヨハネ 1 : 9、10 「9 私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりたがっているデオテレペスが、私たちの言うことを聞き入れません。:10 それで、私が行ったら、彼のしている行為を取り上げるつもりです。」、教会の中にこのような人物がいたのです。彼の名前はデオテレペスです。彼は何をしたのか？続けてこうあります。「彼は意地悪いことばで私たちをののしり、それでもあきらまずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、教会から追い出しているのです。」と、ここで注目していただきたいのは「意地悪いことば」と「ののしり」という二つのことばです。

・「意地悪いことば」 : これは「精神的に悪い、邪悪な」という意味です。「悪口」を考えたとき、悪口というのはその人を誉めたりはしません。却って、その人の評判を下げることで、その人への信頼を壊そうとします。悪口を流すことによってその人に対する人々の信頼を壊そうとするのです。まさに、そういう動機をもって、この人物はヨハネたちのことを悪く言いふらしていたのです。

・「ののしり」 : これは「誹謗中傷、虚偽宣伝、口頭誹毀などをする事」です。事実を曲げて人のことを悪く言うことです。

この教会の様子が見えます。このような人たちが教会の中にいたのです。悪口を語る者たちがいたのです。みことばで見て来たように、私たちは互いに、それぞれの信仰が成長することばを話しなさいと言われていたのに、全くそうでないことを語っている者たちがいたのです。なぜ、そうなのか？その理由まで聖書は教えています。9節にこのデオテレベスは教会の中で「かしらになりたがっている人物だ」と書かれています。この人の問題は「人に仕えたくない」、「人によって仕えられる」ことを求めていることです。そのためにヨハネたちをののしっていたのです。彼らをののしることによって、人々がヨハネたちに仕えることを止めて自分に仕えるようにと、彼の問題は「プライド」でした。私たちも注意しなければいけません。同じような弱さを持っているからです。

今日のテキストに戻って、パウロは警告をするわけです。救いに与ったあなたがこのようなことをしてはならないと。私たちは神がお喜びになること、それを語る者として生まれ変わったのだから、あなたの口から悪いことばをいっさい出してはいけないと言います。私たちは人に対して悪口を言うのを止めなければいけません。確かに、人があなたの悪口を言うかもしれません。その人の悪に対してはその人に責任があります。でも、よく考えなければいけないのは皆さん、もし、だれかがあなたの悪口を言った時に私たちの自然な反応は、その人の悪口を言い返すことです。でも、それは神に喜ばれることではありません。あなたの口から悪いことばをいっさい出してはならないからです。神は私たちに何を求めておられるのか？人の悪を私たちは防ぐことはできません。でも、あなた自身が為す悪は神の助けによって防ぎなさいということです。私たちがどんなことばを口から出すのか、私たちは注意しなければいけません。

パウロが教えてくれたのは、あなたはことばにおいて変えられた、神が喜ばれることを話せる、そういう人へと生まれ変わったということです。この神の助けをいただきながら、そのような人として歩み続けることを神が求めておられることは明らかです。

2) 「知識」

「すべての知識において」と言います。

(1) 「神のみこころを知る」 : 「知識」とは「神のみこころを知る」ものです。聖書を通して、私たちは神のみこころを知ることができます。でも、そのためにはこの聖書のみことばを正しく理解しなければいけません。私たちが正しく理解するために聖霊なる神を与えてくださり、そして、教会に教師がいるのです。こうして私たちは神のみこころを正しく知ることができます。その知識が必要と仰うのです。でも、知識だけがあってもそれだけでは何もなりません。この「知識」とはただ知るだけではない、それは「実践する力」です。

(2) 「神のみこころを実践する」 : コロサイ人への手紙1章を開いてください。パウロはこのコロサイの教会の人たちのために祈っています。パウロは彼らのためにどのようなことを祈っていたのでしょうか？1:9、10「:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」と、パウロが祈り続けていたことは、このコロサイのクリスチャンたちが「神のみこころに関する真の知識に満たされること」、それが彼の祈りでした。

☆「神のみこころに関する真の知識に満たされる」とは？

(a) 「みこころ」 = これは「神のご意志」です。私たち信仰者がどのように生きていくのか、神が私たちに何を望んでおられるのか、神の意志です。

(b) 「真の知識」 = これは「深い完全な知識、また、認識力」とも言われます。つまり、神のみこころを正確に見分ける力、判断する力です。

ですから、パウロがこのコロサイのクリスチャンたちに求めたことは、彼らが神のご意志、神のみこころをどんな時にでも正しく見分けることができる、正しく判断することができることです。彼らがそのような人になることを願ってパウロは祈っているのです。

(c) 「満たされる」 = このことばは「一杯にする、欠けているところを満たす、完全にする、完成する」などの意味をもちます。また、「支配される」という意味もあります。みこころを正しく見出すこと、それを見極め判断する力がいつも彼らを支配しているようにと。パウロが願った信仰者の姿は、どんな時でも神が望まれることは何か、神が喜ばれること何か、それを見極める信仰者です。もちろん、そのために必要なことは、神のみことばを知らなければいけません。どんなに「みこころだ」と言ってもみことばに反することは絶対にみこころではありません。みこころは必ずみことばと一致するのです。ですから、私たちがみことばを知らなければいけません。

同時に、私たちが日々直面するいろんな状況にあって、何が神の前に喜ばれるのか、そのことを考えて正しい選択をする、そのためには神の助けが必要です。ですから、パウロがコロサイの兄弟姉妹たちのために祈ったことは、コロサイのクリスチャンたちがいつも神のみこころを見出して、「これが神のみこころだ」という確信を持って、そのように歩むことによって、彼らが神の栄光を現す者として成長していくことです。そのことを願っていたのです。

今日のテキストに戻って、パウロはこの5節で特に二つのことを特筆していました。「ことばにあって、そして、知識において」と、すべてにおいて豊かにされたと言います。救われた者としてそれにふさわしく歩いていくために必要なすべてのものが与えられたのです。あなたのことばにおいても、あなたはいつも神が喜ばれるように話す、そういう人として生まれ変わり、そのために必要なものは十分に備えられていると言います。同時に、神のみこころを知りそれを実践すること、そのために必要なすべてのものが備えられたと。ですから、この箇所ではパウロが敢えて私たちに言います。私たちが救いに与った者としてクリスチャンとして、私たちのことばにおいても歩みにおいても、神がお喜びなることを実践できる、そういう人として生まれ変わったし、そういう人として歩いていくために必要なものが常に十分与えられていると。この約束を聞いたなら私たちは「こんなどうしようもない自分でも、こんなに弱い愚かな自分でも、こんな不信仰な者でも神が喜ばれることを実践できる。ことばにおいても行いにおいても神を喜ばせることができる。そんな人として歩むことができるし、そんな人へと成長することができるのだ。」と思いませんか？

パウロはこの二つのことを取り上げて、次に、6節を見てください。「それは、キリストについてのあかしが、あなたがたの中で確かになったからで、」とこのように繋いでいます。救いのメッセージである福音が信じる罪人のうちに為されるみわざを語っています。

・「キリストについてのあかし」：この「あかし」ということばも新約聖書の中に19回出て来ることばですが、そのうち15回は「証」と訳されており、4回は「証言」と訳されています。というのは、イエス・キリストを信じた弟子たちはイエス・キリストの証をしたのです。つまり、主イエス・キリストはいついだれなのか？この方は何を為されたのか？そのことを彼らは「証」したのです。使徒の働き4：33に「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みとそのすべての者の上にあった。」とあります。十二使徒たちは主イエスの復活を非常に力強く証したのです。彼らは出て行って神学のことを話したとは書かれていません。彼らがしたことは「証」です。

このキリストについての証、彼らはそのキリストについての証を聞き、そして「あなたがたの中で確かになった」と言います。この「確かになった」という動詞は「確認する、真実であることを証明する、立証する、確認、証拠」という意味があります。つまり、証によって伝えられた救いのメッセージである福音が、聞いた者たちの心のうちにしっかりと根付いたということです。つまり、この救いのメッセージをこの人たちは受け入れたのです。救いのことです。

パウロが教えることは、救いによって私たちは神のその豊かさをいただいた。つまり、救いに与った者たちは神が喜ばれるように生きていくことができるということです。ことばにおいても変化が起こるし、行いにおいても変化が起こります。なぜなら、救われているからです。まさに、このような変化こそが救われたことの証だとパウロは言うのです。実際に、パウロ自身の証を見ることが出来ます。

パウロの例：パウロはステパノを殺すことに賛成していました。ステパノは殉教者です。彼を殺すことに賛成していたのです。恐らく、パウロはステパノが語ったメッセージを聞いているでしょう。全部か一部かは分かりません。また、ペテロたちが語ったメッセージも聞いたでしょう。でも、そのメッセージを聞いてもパウロは受け入れようとしなかったのです。却って、そのメッセージを語る者たち、そのメッセージを信じる者たちをより多く捕まえて彼らを迫害しようとダマスコに向かっていたのです。その途中で彼はイエス・キリストに出会うわけですが、そして、彼はこの救いに与るのです。その救いに与った後、いったい彼に何が起こったのか？非常に興味深いです。

恐らく、皆さんはご存じでしょう。彼はダマスコに行きます。その時までは目が見えなくなっていました。アナニヤに会って、そして、彼の目が見えるようになります。その後何が起こったか？使徒の働き9：17～「:17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。

「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」:18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がり、バプテスマを受け、:19 食事をして元気づいた。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。:20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。:21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではな

いのですか。」:22 しかしパウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」、これがパウロ自身に起こった出来事です。彼はその証をしたのです。信仰に与った者たちはみな「証」をします。「神はこんなことを私にしてくださった。」と。それは作り話ではありません。

このメッセージの中でパウロは、コリントの教会の人たちに対して、救いに与った者たちにはこんな変化が起こるのだということを明らかにするのです。この世に人間が作り出した宗教は山ほどあります。それを信奉する人には個人的な達成感をもたらすかもしれません。しかし、このイエス・キリストが与えてくださる救いはその人を全く新しく造り変える、その人を新しく生まれ変わらせるのです。そして、その「新生」、新しく生まれ変わることを経験した者たちがこの方の「証し人」として生きるのです。

こんなに宗教の溢れた私たちの国にあって、このイエスの救いは宗教ではなくて真理だどどのように伝え、どのように人々を納得させるのか？すべての教えが「自分たちの教えこそ真理だ」と言っている中にあって、どのようにこの聖書だけが真理だと証明することができるのか？パウロは教えてくれます。「それはあなたの生き方によって、あなたの変えられた生き方によってです。」と。なぜなら、イエス・キリストを信じた時に私たちは新しく造り変えられたからです。しかも、新しく造り変えられた者として、あなたが歩いていくために必要なすべてのことが豊かに十分にあなたに与えられています。だから、あなたはそのように生きることができるというのです。

この祝福を神は私に与えてくださったのです。確かに、日々の生活を振り返ってみると、そこには罪、罪、罪、神を落胆させること、神を悲しませることが山ほどあります。でも、感謝なことに、神は私たちを変え続けてくださっています。みことばで神のみこころを知り、そのみこころに従うことによって神の働きが私たちのうちに為され続けていくのです。そして、私たちはこの世に対して語るメッセージは、ことばだけでない、変えられた生き方をもって、このキリストこそが確かな救い主であることを伝えるのです。

皆さん、必要なすべてのものがあなたには与えられたと、その祝福に与ったものとしてそれにふさわしく歩むことです。それは可能になったのです。備えられた神の助けをいただきながらそのように歩んで、私たちの主がどんなにすばらしいお方なのか、そのことをこの世にしっかり示していきましょう。神はそのことを望んでおられ、そのことをあなたを通して実現させてくださるのです。このみことばに立ってこの一週間を歩んでください。